

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (一)

第二則 達磨廓然

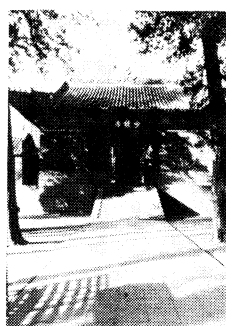
〔示衆〕 衆に示して云く、下和^{げんか}三たび献^{けん}ず、未だ刑に遭^あうことを免^{まぬ}がず。夜光人に投^なず、劒^{けん}を按^{あん}ぜざること鮮^{あま}し。卒客^{そくかく}に卒主^{そくしゅ}なし、仮^けに宜^{よろ}しうして真に宜^{よろ}しからず。差珍異宝、用うることを著^えず、死猫児頭^{しみようにとう}、拈^{ねん}出す看^みよ。

〔本則〕 挙^こす、梁の武帝、達磨大師に問う。
 (清旦に起き来^きつて、曾^{さへ}つて市に利^いあらず)如何^{いか}なるか是^これ聖諦^{しやうたい}第一義^{しだうぎ}。(且^{しか}く第二頭に向^{むか}つて問^とえ)磨^か云^いく、廓然無聖^{かくねんむしやう}。(劈腹剜心^{ひつぷくわんしん})帝云^いく、朕^{ちん}に對^{たい}する者は誰^たぞ。(鼻孔裏^{びくうり}に牙^やを認^とむ)磨^か云^いく、不識^{ふしき}。(腦後^{のうご}に腮^{さい}を見る)帝、契^かわす。(方木^{かふ}は

円竅^{えんきやう}に入らず)遂に江を渡り、少林に至^{いた}つて面壁^{めんぺき}九年す。(家に滞^ち貨無ければ富^ふまず)。

〔頌〕 頌^{じゆめ}に云く、廓然無聖^{かくねんむしやう}。(一廻水^{いつかいすい}を飲^のんで一廻^{いちかい}噀^{しゅつ}に著^つく。)来機^{らいき}逕庭^{けいてい}。(面の赤きは語^ごの直^ちきに如^{ごと}かず)得^えは鼻^びを犯^{おか}すに非^{あら}ずして斤^{しん}を揮^{ふる}い、(好^{こう}手手中、好^{こう}手に誇^ほる)失^{しつ}は頭^{かうべ}を廻^{めぐ}らさずして甑^{そう}を墮^だす。(已^い往^{いぢやう}は咎^{とが}めず)寥^{りやう}寥^{りやう}として少林^{しやうりん}に冷坐^{れいざ}し、(老^{らう}いて心^{しん}を欺^やめず)黙^{もく}黙^{もく}として正^{しやう}令^{れい}を全提^{ぜんてい}す。(猶^なお自^{おの}ずから兵機^{へいき}を説^{とく}く)秋清^{しゆせい}うして月霜^{つきそう}輪^{りん}を転^{てん}じ、(高^{たか}く眼^{まなこ}を著^つて看^みよ)河淡^{かたん}うして斗夜^{とや}柄^{へい}を垂^たる。(誰^{たれ}か敢^{あへ}て承^{しょう}攬^{らん}せん)繩^{じよう}として衣鉢^{えはつ}児孫^{いそん}に付^つす、(妄^{もう}想^{さう}すること莫^なれ)此^これより人天^{にんてん}薬病^{やくびやう}と成^なす。(天行^{てんぎやう}已^いに過^すぐ、使^し者^{しや}須^すらく知^ちるべし)。





嵩山少林寺の山門

『従容録』六巻は、南宋の嘉定一六年（一二二三）に曹洞宗の万松行秀が燕京（今の北京）報恩院の従容庵で撰述した書物です。万松（一一六六―一二四六）は、黙照禅の巨匠、宏智正覚（一一〇九―一一五七）が古来の禅書から古則百項目を選んで頌をつけた「頌古百則」をもとに、円悟の『碧巖録』にならって、示衆・著語・評唱などを加えました。

従来、『碧巖録』も『従容録』も、ほぼ同一形式をもった中国禅の文学作品として、禅門で愛好されてきました。もっとも、前者が「宗門第一の書」として、臨済・曹洞の別なく広く流行したのに対して、後者は曹洞宗だけに用いられています。いずれも多くの注釈書があり、禅の思想や風光に親しむための、恰好の書といえます。

『従容録』の原本は、全百則のうちに、(1)示衆、(2)本則（著語）、(3)評唱、(4)頌古（著語）、(5)評唱という形式がとられています。

(3)と(5)の評唱は非常に長いため、通常はこれが省略されています。ここでは、百則中からいくつかを抄出し、眼目とするところを学びたいと思います。漢文体は読み下しに直し、著語には（ ）を付けて区別しました。

＊

まず、達磨忌にちなみ、第二則の「達磨廓然」です。『碧巖録』では第一則にランクされる有名な公案です。

示衆は、万松が自分の宗旨の根本をのべたもので、難解な語はみな故事に基づくからです。卞和の玉も夜光の玉も、すべて本モノを知らずにいるおろかさを指摘したもの。仮と真は、たとえば泥酔中と坐禅中ほどの違い。宝石も死猫の頭も、価値観の発生以前の、生きた事実のすばらしさを知らしめる序説、といえましょう。

本則は、ダルマが海を渡ってシナに着き、梁の国の武帝との問答の話。時代は六世紀初め、場所は南京。多くの寺を造り、僧を度し、崇仏のはまれ高い武帝が、ダルマに「無功德」とやりこめられ、それに続く両者の問答。「聖なる仏法の奥義は何か」「どこにも聖なぞない」「では、朕の前にいるそなたは誰だ」「考えてもわからん」。

こうして、ダルマは揚子江を渡り北魏へ行き、面壁九年に入る。

この公案の眼目は、ダルマの「廓然無聖」と「不識」です。「廓然」とは、カラリと澄みきった大空のように、迷悟・是非・善悪などの一切の対立をこえた状態をいいます。「無聖」も、凡聖をこえた絶対の境地。つまり、ダルマの仏法は空、それも絶対空の立場を表わしたものです。

私は昨年夏、痛風を患ってからしばらく歩行が不自由なため、常に足を意識し気がかりでした。昨今は養生したせいか、ほとんど意識しなくなりました。同じことが、目や耳や鼻や、からだ全体についてもいえるでしょう。そして、断言できます。心に何のひっかかりもないのが空なのだと。空とはすばらしい状態なのですね。

武帝の「対朕者誰」は、かならずしも悪い問いではありません。ダルマさん、無聖というけれど、ここに相對している貴公は、悟っている聖人さんではないのかね、という素朴な問いだからです。しかし、理論と現実とをゴツチャに、文字のぬかるみに落ちていくから、所詮ダルマの仏法とはかみあいません。

ダルマの「不識」、これは「知

らん」ということではなく、ぎりぎりの仏法は思慮分別を絶したところにあることを、再び教えてやった言葉です。だから、万松は「腦の後ろに腮を見る」と著語したので、頭の後ろにあごがあるとは思慮分別をこえた立場です。私たちは、いかにおろかな私見や私観におちいつていることか。

もう一つ、この公案の痛快なところは、一介の沙門が帝王に勝ったということです。これは、禅の俗界に対する優位性、俗世間の中に真実を見ようとする立場を示すもの、といえます。こうした立場は、時代をこえて今日の私たちに、かぎりない心の希望を与えてくれるものです。

頌古の部分は、宏智の格調高くすがすがしい頌と、それに対する万松の著語です。宏智は、特にダルマが少林寺でひとり静かに黙坐した消息を讃嘆しています。そして、それが縄々として衣鉢を児孫に付した、つまりダルマの坐りの法門が連綿として今日まで伝わったといっているのです。逆にいえば坐禅をおろそかにすれば、禅門の命脈は絶えるということですね。肝に銘じて、しっかり坐らなければなりません。

（龍泉院山主）

中国仏教寺院の現況

椎名 宏雄

この九月二日から二五日までの二週間、第七次の駒沢大学中国仏教史蹟参観団の一員として、大陸の仏蹟を訪れてきた。今回の団は、特に浙江省に遺る道元禪師と如浄禪師ゆかりの寺院・寺蹟を中心に踏査しようとする計画であった。もちろん、その中には道元禪師が本師如浄によって身心脱落の徹底をえた、天童寺も含まれていた。

ただ、外国人による中国旅行は、今なお原則として解放地だけに限られており、両禪師の遺蹟中には未解放地が少なくないので、要望の実現のために費した団三役の苦心は、推して知るべしであった。

こうして、参観が不能となった雁蕩山と寧波の両瑞巖寺、奉化県の岳林寺、鄞県の大慈寺などを除き、禅門五山のすべてを含む二三の寺院・寺蹟を訪れることができた。その中には、これまで邦人未紹介の温州江心寺・天台山万年寺、奉化県雪竇寺・鄞県大梅山・寧波招宝山、などが含まれる。

もとより、こうした踏査旅行は、通常の観光とは趣を異にし、熱風

の夜行列車、往復一〇時間の渡海、高所への登山、大河の渡河、一日何百キロのバス移動など、ハードスケジュールの連日であった。だが、こんな労苦によってこそ、昔日の禅の山河のたたずまいを、わが目で踏みしめ、わが目にやきつけられたのであり、仏天の加護を感謝するばかりである。

中国の仏教界の現状を一言でいえば、今や完全に復興期に入ったといえよう。約二〇年ほど前から数年間続いた文化大革命の嵐は、仏教寺院や僧侶に大打撃を与えた。仏像・仏具・經典の大半は破壊・焼却され、僧侶の多くは還俗し労働者となった。無数の伽藍も壊されたが、優秀な建物は破壊をまぬがれ、その多くは工場・学校・病

院・民家などに転用されてきた。

四人組が処刑され、四つの現代化が推進される近年、年ごとに宗教政策は緩和の傾向にある。仏教寺院も、昔からの名刹や大都市では、すでに完全に復興された大伽藍に大勢の僧侶を擁し、多くの仏像や位牌をまつり、盛大な法要を営み、また、観光客で混雑する寺が増えつつある。今回の訪問先では、天台山国清寺・寧波七塔寺・鄞県阿育王寺・同天童寺・普陀山法雨寺・同普濟寺・上海竜牙寺・同玉仏寺・同静安寺、などがそれであった。中でも、七塔寺では七日間連続の水陸会（セガキ）が盛んに行われていた。

もっとも、法事の施主は里帰りの華僑が多く、その費用は一万元（一元は約八〇円）以上で、とても一般人民の拠出できる額ではない。大陸人は、各自一〇〇元ほどを出し合い、何十人が合同でなければ法事が営めないのである。また、僧たちは法要のほか、寺の外での布教は禁止が解かれてはいないが、実際には何もしていないようである。葬儀は、僧侶ヌキで行われているのだ。

目下、政府は巨費を投じて、全国的に寺院の修覆を進めている。ただそれは、観光の対象と、法要

儀式の要望が強い寺院が優先であるらしい。寺を整えれば、僧が必要である。そこで、僧侶の養成も急務であり、北京や南京には仏教の専門学校が造られ、たしかに若者の出家者も増えつつある。しかし、日本と比較すると、まだ一握りにすぎない数の僧たちにして、そのテキストとして用いる仏教書は、質量ともに不足している。現に、七塔寺や阿育王寺の僧たちが常用している儀軌本は、まぎれもなく香港からの輸入書であった。

上海で最大の書店の中を探しても、一般向きの仏教書は皆無である。図書館や大学の書架も、仏教書は古く、しかも数が少ない。したがって、仏教は歴史上の遺物としてしか教育されていない若い世代は、説法を聞くことも、仏書を手にすることも不可能に近い現在、仏教の教えなど知りようもない、というのが現状である。こうした状況は、まだ当分続くであろう。

とはいえ、寺院への参詣人は、数年前の比ではなく、香烟の絶えぬ堂宇に五体投地の礼拝をする姿はもはや珍らしくない。そこには、政治体勢をこえて、仏菩薩への救いを求め、現世の福果を願う民衆の心をみる思いであった。



天童寺羅漢堂

龍泉院の地獄絵図

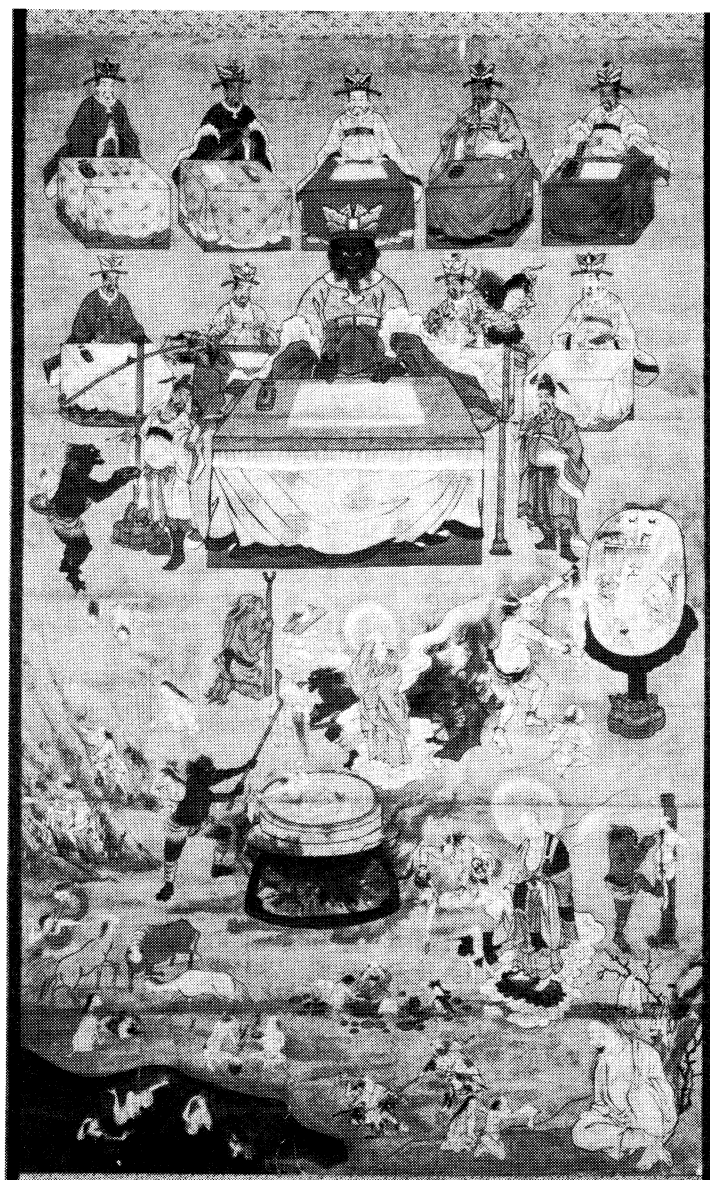
千葉市 寺田哲朗

提唱を待つ間、正面の床の間に掛っている地獄の図の軸が目に入って参ります。

中央の方に、閻魔様が、何となく憎めない顔で、法廷で行われ

ているいろんな刑を見つめています。手前の方、つまり軸の下の方では、話にきく針の山や、釜ゆでの場面、が描かれています。この軸を見る度に、昔、小学校

一年の頃読んだ童話を思い出します。軽業師、薬屋、あんま師の三人が地獄に落ちたが、軽業師が二人を背負って針の山を渡り、薬屋が釜ゆでにもやけどしない薬を供し、最後に、閻魔大王に呑み込まれた時、按摩師が大王の腹内の筋を引っぱって、ついに三人共吐き出されて助かるという面白風の話でしたが、幼年の私にとっては、大変怖い身近な話でしたので、龍



泉院に何う度に、当時の情景が浮びます。

さて軸の右方には、白鬼に髪をつかんで鏡の前に吊されている人がいます。この人は今、自分では気付いてなかった。または見たくない過去の姿をありありと見せつけられているのでしょう。針の山や釜ゆでのような、身体への刑は勿論ですが、過去からの自分の姿を見せられるのも人によっては辛い事でしょう。鏡は他ならぬ自分の記憶であり、普段は意識の底にしまい込まれていても、この画のように、何かの機縁で、望むと望まぬとに拘らず、見ることになるのでしょう。

さて、老師様は、いつも「何々の為の坐禅は本物ではない」と仰されます。それでも私の場合は、「何か」を期待しつつ続いているというのが正直の処です。

上の地獄絵図は、龍泉院に伝わる古図で、作者も年代も不明ですが、江戸中期から後期にかけての作品と推定されます。さまざまな地獄の情景を一枚に描いた大幅としては、近在にない珍しいものといわれます。例年、夏には本堂内に掛けられます。

平和の陰に…

柏市 有村 明子

戦後四〇年の歳月を経て、現在では終戦記念日の近くを除いては、あまり戦争という言葉も耳にする事がなくなりました。私の両親は、戦争の体験者の一人です。私は、その両親から、戦前・戦中・戦後とその苦しい体験を、折にふれて聞かされてまいりました。とはいっても、私自身は戦後の生まれであり、戦争そのものを体験した訳でもなく、大変漠然としたものとして、想像の世界で戦争を理解してきたにすぎません。

そんな私に、大きな影響を与えたのが、昨年の五月に、祖父の郷里鹿児島への旅で、「知覧の特攻隊基地」を訪ねた事でした。明日の出撃を目前にして、整然と両親に別れの手紙を認め、翌朝、日本の国の為にと、大空に飛びたつていった特攻隊の皆様の姿には、心をうたれました。二〇歳そこそこで、命をかけて大空に飛びたれた、ある特攻隊員の方の遺書を、バスのガイド嬢の朗読で、拝聴させていただいたのですが、溢れる

涙をどうすることもできません。今まで戦没者とか、軍人という言葉に、正直いって異和感を感じていた私ですが、この知覧の地を訪れる縁をいただいたお陰で、軍人として戦没された方々が、妻子や親の辛さを念じながら、その最愛の人が住んでいる処であるが為に、この日本の国を守らんとして、戦い、傷つき、死んでいった尊い命の犠牲者であられたことを、今さらながらに教えられました。

もちろん、この大戦で犠牲となられたのは、軍隊にいた方々だけではありません。広島・長崎の原爆、また東京大空襲をはじめとして各地方都市の空襲などでは、多くの尊い命が失なわれました。かつて、広島島の地を訪ずれ、夜空に照らし出された原爆ドームを目のあたりにした時、恐怖にもにた戦慄を覚え、眠れぬ夜をすごした事がありました。資料館に展示された多くの被爆した品々の中には、思わず、目を覆いたくなる様なものもありました。平和公園の一角

で、今も燃え続けている平和の炎が、私の訪れた一〇数年前にも、多くの犠牲者の冥福を祈るかの様に、静かに燃えておりました。爆心地にしながら、今なお生存されている方々の証言が、テレビで放映された事がありました。ある被爆者の方が、「被爆した当時の事は、あらゆる言葉をつくして語ったとしても、ほんの一部を語っているにしかすぎません」そんな意味の事を語っておられたのが、今も印象に残っております。



広島市平和公園

平和な時代に生まれ育った私達、戦後世代の大部分は、今の平和な時代のほんの少し前に、多くの人が戦い傷つき死んでいった時代が存在し、その時代に巡り合わせた人々の尊い犠牲のうえに、現在の平和が成りたっている事を忘れがちです。知覧の地を訪れるまで、私もこの平和を、当然の権利のごとく、平然と受けとめておりました。しかし、この平和の陰に、死の直前まで、最愛の人を思い続け、日本の国の為にと若い命を散らしていった人達が存在していた、その事実を目のあたりにした時、私は自分の生きてきた様子を、反省せずにはいられません。思わず数珠をとりだし、戦死された特攻隊員の皆様の御冥福を祈り、合掌しておりました。

この平和の陰に、戦争によって命を落された多くの人々が、存在する事を忘れることなく、その方々の分までも、一所懸命に、生かさせていただくことが、今、私にさせていただける、戦没された多くの方々への、唯一の御供養となるのではないかと、そんな事を思う今日この頃でございます。

この平和に感謝をこめて

合掌

恒例の筍掘り

長かった冬も、ようやく終りを告げた四月二十八日、ご住職様のご好意により、龍泉院の裏の竹藪で、恒例の筍掘りが行なわれました。暖い春日の中、参禅者二十七名が参加して、竹藪の中に、柔かな産毛をのぞかせている筍を掘りだして、それぞれ、持ちきれないくらい、沢山のおみやげをいただきました。

本当に有難うございました。今ここに改めて自然の恵みと、ご住職様のご好意に感謝して、あの時の思い出をお二人に綴っていただきました。

筍掘り雑記

柏市 五十嵐嗣郎

今日の参禅会は、いつもの厳しい霧囲気と異なり、なにかウキウキした所がある。子供が遠足に行く時の様子にちよっぴり似た感じがして、なんとも面白い。

坐禅後、老師による「一顆明珠」の講義も今日は短時間に切り上げ、いよいよ筍掘りが始まった。小生は筍掘りが初めてなので、何の

用意もしていないが、ベテランの方々はゴム長に鍬やスコップなど用意周到怠り無しである。

庫裡の横手から竹藪に入り、龍泉院さんのスコップをお借りして、力まかせに掘っていると、ベテランさんが筍の少し傾いている所に鍬をあて、「ここに一発かませると簡単に掘れる」と教えてくれる。何事にもポイントがあるもので、世間ではこれをノウハウと呼んでいる。

小生は、中国の故事や、母親が生前に「筍は土の中から掘り出したものが柔かくておいしい」と言

った記憶から、わずかに顔を出している筍を選んで掘っていた。しかし、家で料理して食べた所、掘り上げ直後では、かなり大きな筍も十分柔かく、おいしいことを発見した。経験によらない生半かな知識は、いかに不正確であるかを知らされた。

大きな竹藪の筍もさすが一時間ほどで掘り上げられた。一人平均大小合わせ十本ほどの筍をお土産にいただき、御近所の方にもお分けた所、皆さんからおもしろくとお礼を言われ、来年もよろしくと注文(?)された方もあった次第です。

因に、当日の我家の筍料理は、

たけのごはん

(極めて一般的)

若竹汁 (一般的)



「コレハ大物ダゾ」

龍泉院の裏山の筍掘りは、寒さのため例年より遅れて四月の末と

筍掘りに寄せて

印西町 富田文子

たけのこの土佐煮 (簡単)

姫皮の磯辺あえ

(これは珍味)

我家の愚妻より一言。「新鮮な筍は、エグミがなく、反対に甘みがあって、おいしいわ、来年はもっともらってらっしゃい。御近所の奥様にも喜ばれるんですもの」ですって。小生が参禅に行くのがどれだけ理解されているのか、疑問視せざるを得ません・・・

ホント。

なりました。当日は、午前九時から坐禅、そして『正法眼蔵』の講義と続き、おわりの座談を短かくはしょって、参禅者一同、軽装で裏の竹藪に集りました。そこ、ここに顔を出す筈を見て、一同大喜び、そのききとしてゐる姿はまさに童心そのものでした。

こんもりと盛り上るわくら葉の下を払いのけると、一〇センチくらいの筈が顔を出します。筈掘りの上手な寺田さんは、スコップを二回程土の中に入れたかと思うところ、と掘り出してしまいます。私は思わず「名人ですね」と言っていました。寺田さんの話により、竹の皮の先の向きを見て掘れば、竹の根を楽に切る事ができるとのことでした。たちまち沢山の筈が掘り出され、小山に分けられていきます。百本程もあったでしょう。ご住職さんは、私達のために、筈を入れる袋まで用意して下さいました。帰り道、お友達の家に寄り、筈をお頒けしたら、待っていてくださり、大変喜ばれました。我が家では、当分新鮮な筈料理が続きました。本当に有難うございました。ただ坐禅の最中に、筈掘りが浮かんで、無心になれなかった自分を、深く反省いたしました。

転機と坐禅

我孫子市

誰でも転機があります。そして、誰でも社会人になる時、一生の中で一番大きい転機ではないでしょうか。また、社会人になってから、も外的や内的な要因により、転機をむかえることがあります。

転機が「良かったのか」また、「悪かったのか」は、一生を清算してみないことには分らないことでもありますし、一方よりよい一生をおくるための精進が転機である

三町 勲

とも言えます。

私は、工作機械（鉄を削る機械）の製作業の技術屋として二〇数年の長い間、開発設計の道をひたすら歩んできました。毎日が、新商品、開発、創造、探究、調査、競争等の言葉と行動の中の生活でありました。

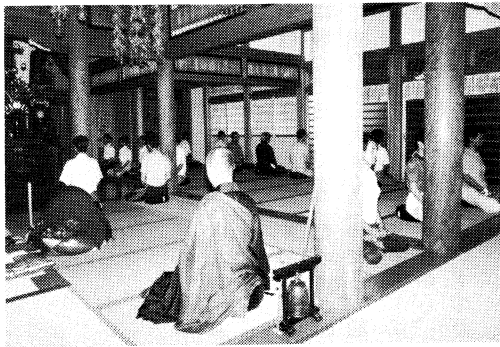
そして、三年前に突如として品質保証部門に転籍となりました。職場や環境が一変したのです。毎日が、品質、検査、保証、お客、クレーム、信頼性等の言葉や行動の渦に没入することになったのです。そして、「過去の技術は生かせるだろうか」の不安、「新しい職場における知識の吸収」のあせり、過去の足跡への執着心、現状への陰悪感等が錯綜して心が曇るばかりでした。

そんな或る日、私と全く同じ境遇の中にあって、暗い生活を打開するために、日本中の高い山に登ることを決心し、実行した人の述懐の記事に接したのです。「よし心に柱をたてよう」。この気持が参禅への発心となったのです。過去

に、友人に紹介されて鎌倉の円覚寺で参禅したのが、この道へこだわりなく入って行けた理由でもあります。

龍泉院の参禅会の門をたたいて、はや二年半が経過した現在、参禅は私の大きな転機であったと思われるのです。つまり参禅を通しての日々の生活の中で、「自分の在るべき姿のまゝで、即ち、自然の姿で物事に処する」心情が芽生え、日増しに強くなり、心の柱の土台となってくれたのです。

科学や技術が進むにつれ、われわれを取り巻く事象が、マイクロからマイクロになって行きます。そして、一人一人の役割も、数々マイクロ化され、一人一人の気持が狭くなるような気がします。そんな世の中で役割はたとえマイクロになっても、参禅を通して常に心は広く遠大に持ち続けたいものです。



七月の定例参禅会



ささやかな私の信心

柏市 神戸 正

今から二〇数年も前になります
が、私は東北電力を停年で退職し、
新居を構えて柏市に移り住むよう
になりました。生れてから旧制の
中学を出る迄しか住んでいない、
生れ故郷の越後高田よりも、柏で
の生活の方が長くなり、名実共に
私にとっては第二の故郷であるわ
けです。

二〇年も経てば、当時の新居で
も大分古めかしくなり、周囲には
立派な住宅が建ち並んで、近頃は
すっかり縮こまっているように感
じられます。然し、こんなわが家
にも、一つだけ他にはないと思う
珍しいものがあるんです。暗い台
所に、余程注意しないと気がつか
ない額が掛けてあります。それは、
この家の新築記念に、私が心をこ
めて清書して掲げた五観の偈です。
最初の頃は台所で食事をしていた
ので、家族全員唱和しながら有難
くご飯をいただいておりますが、
やがて長男は亡くなり、娘は他家
に嫁ぎ、食事も居間でするように
変るなどして、その後はさっぱり

活用されてはおりません。台所の
水道工事に来た職人さんが、ふと
この額をながめて思案顔に、「お
宅はお坊さんの出ですか」と家内
に尋ねたそうです。なんとか孫達
でも今少し大きくなったなら、額の
模様替えてもして、昔の様にみん
なで五観の偈を唱和しながら、有
難くご飯をいただきたいものだと
念願しています。

これは昭和一〇年頃だったと思
いますが、その当時、私は信州の
高瀬川系の発電所に勤務してお
りました。確かこの地域の産業報
国会が催した行事だったと思いま
す。大町市の郊外にある大沢寺とい
う曹洞宗のお寺に、企業の幹部職員
を集めて、二泊位いの参禅会があ
りました。私も初めてこの参禅会
なるものに参加して、どんなこと
をしたのか、細かいことは忘れて
しまいました。が、兎に角、自然に
身が引き締まる程の卓越した行事の
連続で、感激して帰宅したことを
はつきり憶えております。その時、
五観の偈を唱和しながら合掌して

ご飯をいただいた事など、特に印
象に残っていたものですから、そ
の後三〇年を経たわが家の新築記
念に、自作の額が出来たわけなん
です。尚この大沢寺は、私が現在
世話人をしている長全寺の、亡く
られた先住谷内老師が立身の寺で
あると承り、因縁の深さを痛感
いたしました。それにも増して、現
在お世話になっております龍泉院
参禅会のご住職、椎名老師と亡く
なられた谷内老師とは、最も深い
関係がおりになりますので、更
に更に仏縁の深さを感じる次第で
あります。

柏の長全寺でも、船本老師の頃、
坐禅と詩吟の会という企画が出来
て、渡辺慧教さんご兄弟にご指導
を受けたことがありました。有難
いことだと感謝しておりましたが、
色々なご事情もあったのでし
ょう、余り長く続かずに見切れとんぼに
終わりました。その頃、又渡辺慧教
さんの瑞世式が永平寺で行われま
した。どんなことをなさるのか興
味もありましたので、お伴をさせ
ていただいたことがあります。確
か三日間位であったと記憶してお
ります。その儀式たるや、実にす
ばらしいものでありました。その
間、出来るだけ修行僧の方々と行
動を共にし、朝夕の坐禅なども一

緒にさせていただきました。在家
では出来ない、ほんとうにすがすが
しい山内の気分を味わ、せていた
だき、此の上なき感激でした。

昨年の五月には、千葉県で行わ
れた授戒式に参加して、お血脈と
か安名をいただき、私の八〇年の
人生にもさ、やかなから信心の灯
し火がかがやきだしたように思
います。折角のこの灯し火を大切に
守りながら、龍泉院参禅会の導師
様のご高德にひたり、優秀な会員
の皆様のご指導により、これから
の余生をたのしく感謝して送りた
いものと念じております。

龍泉院参禅会、『禅文化』

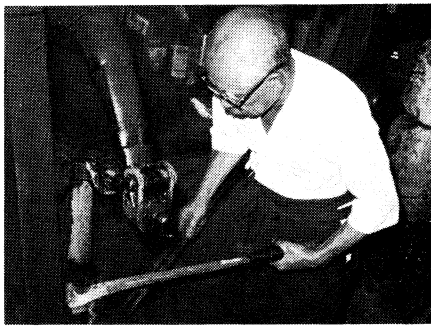
誌上で紹介される

禅文化の啓蒙誌として知られる
『禅文化』第一一七号（一九八五
年七月刊）誌上に、当龍泉院参禅
会の概要が一ページを割いて紹介
されました。本誌は、京都の花園
大学内にあって、禅の学術研究と
文化の向上を目指す財団法人禅文
化研究所発行の季刊誌です。

作刀と坐禅 (二)

釈迦如来・達磨大師・
御師家様に託びる

船橋市 森岡 俊雄



「焼き」を入れる森岡さん

結論を先に申しますと、私は馬鹿であります。まずお聞き下さい。もう三年も前になりましたが、拙出が猛練習をしても一向に腕が上らず困っていた時の話です。

昔から「釈迦は六年、達磨は九年」と申します。月例坐禅の茶話会の席で「六年だの、九年だのと全く腹が立つ、私は五〇年近く作刀を重ねて全々駄目だ」、と発言

いたしました。意にまかせた不用意の発言とはいえ、お釈迦様と達磨大師を引合いにして拙工と比較しようと言うのですから、世の中にこれ程失礼な発言はありません。後で段々と気がついてきたのですが、何故釈迦如来は六年の御修行で成道し、拙工の刀は五〇年間やってみて、何故駄目なのか。ここが判りませんと、この非礼に對してお詫びにはならないと思ったのです。

そこで、やっとそれが判って参りました。と申しますのも、一〇年も「チンダラ、チンダラ」の坐禅が全然成ってないのが判ってきたからです。

よく言われますように、坐禅は「調身」、「調息」、「調心」、すなわち姿勢、呼吸、心、と入って行くのですが、拙工はもう姿勢の点で駄目で、呼吸だの心だのの段階ではないのです。

坐禅の型が

なっていない

こゝまで判って参りますと、拙工は刀工をして刀を打つ型がなっていない。この辺のところでは、釈迦如来や達磨大師の坐禅は、「型」と「呼吸」と「心」が完璧である。だから拙工は、刀を打つ型の完成をやらなければならない、

とつくづくに合点したのです。

そこで、本堂に行き釈迦如来にお詫びをし、席に戻って師に詫び、家に帰って永平寺の檜崎通元老師が画かれた「結果自然」の賛がある達磨大師の像にお詫びしました。だがこれでお詫びが済んだとは

和服と

ジーパン

和服が通常の服装であった昔、商家の小僧さんたちは板の間に正坐して食事させられたとか、女学校では「礼法」という礼儀作法を教える時間があつたとか、きちんと「坐る」ということが、生活の中の一つのマナーとして大切にされていきました。しかし椅子の生活が普及し、ジーパンの出現する時代になりました。女性も内股で歩く必要がなくなったわけです。

坐ると脚の恰好が悪くなる、スタイルが悪くなると、親も娘をなるべく坐らせまいとするようになり、「坐りだこ」は年輩の女性たちだけの知っているものになってしまいました。

ところが一方、近来、成人式や大学・短大の卒業式になると、ほ

思っておりません。現在手に入る材料の「玉鋼」は、砂鉄採集の段階で昔通りのものではなく、誰れが打っても相州伝の極意を行く刀は出来ませんので、それに迫る刀が拙工に出来た時、本当のお詫びが出来る、と思っております。

とどの若い女性が和服を着るのが流行になりました。お茶やお花などの稽古ごとくも、年ねん盛んになってきています。しかし、それは、ただ流行だからだとか、見栄からだ、とばかりはいえないのではないのでしょうか。

「和服」と「洋服」の違いは、洋服があくまでも「立ち姿」を想定して作られているのに対して、和服の方は「立ち姿」をもちろん考慮していますが、同時に「坐り姿」の美しさに充分に気をつけているところにある、といわれています。とすると、彼女たちが、和服に関心を抱くその背後には、無意識のうちに「坐る」ことのよさ・美しさを求めたいという気持ちがあるのかも知れません。それなのに、坐るためのマナーは教えられていない、そこに問題があるわけです。

(曹洞宗ブックレット2「坐る」より)

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと。）

一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
經行鐘 二声 經行
放禅鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聴く

講師 龍泉院住職椎名宏雄老師

昭和六〇年四月より「一顆明珠」の巻を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月八日）。釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雜記

〔参禅会記録〕（内は座談の司会者）

四月二八日 晴 二九名 （藤原 公）

終了後裏山にて「筍掘り」を行う

五月二六日 曇 二五名 （富田文子）

六月二三日 晴時々曇 二五名 （沢村国勝）

七月二一日 晴 二五名 （三町 勲）

八月二五日 晴 三三名 （高間利介）

九月二二日 曇 二五名 （森岡俊雄）

成道会坐禅、本年は一二月八日（日曜）に開催決定。実行委員は寺田健二、徳山浩の両氏にお願いいたしました。

古来、『碧巖集』と共に禅門の双璧と称される二大祖録の一で、特に洞門で重んじられたのが『従容録』であります。これを会員の皆様に紹介したい旨をお願いしましたところ、「従容録に学ぶ」の玉稿を頂き、ここに連載いたします。第一回は達磨忌（一〇月五日）にちなみ、「達磨廓然」です。難しい漢語は現代人には仲々なじみませんが、椎名老師の解説と相

まって禅の風光を味わって頂きたく存じます。

*

八月一六日、恒例の大施餓鬼会が行われた。炎熱下、蟬しぐれ、人いきれの中に導師の香語を読む声朗朗と響いた。この中で「如何が相通ぜん」と述べられた一語が、特に味わい深く感じられた。

前日は終戦記念日、戦後四十年目の記念日を猛暑の内に迎えたが、戦後体験のある世代は、それぞれの過ぎ来し方に想いを寄せたに違いない。今回の戦争を知らない世代の有村さんが、先の戦争に思いを馳せて感銘深い一文を寄せられた。また最年長でおられる神戸氏は、むしろ「さゝやか」の表題は取り去った方が適切な「信」の足跡を披瀝して下さった。そして、各世代の方々がそれぞれに自己を真実語で語って下さるとき、世代を越えて、何か「相通じる」世界がしてならない。

道元禅師は「諸時とまどかに通ずるがゆゑに」といっておられる。男女、老若を越え、場所としては「こゝ」、時間的には「いま」、全てのごとく現成し、通じ合っているところ〓坐禅からの出発が「如何相通」と言わしめるのかもれない。（節光道人記）